

# 原発事故に伴う風評被害払拭への取り組みと学生の認識の変化 - 産学連携プロジェクト「福島支援アイデアメニューコンテスト」への参加を通して -

華学園栄養専門学校

亀山 ころこ

他 5 人

## 1. はじめに

2012年3月11日の東日本大震災による福島第一原子力発電所事故（以降、福島原発事故）の翌日より現在まで、国による福島県産の魚介類や農産物等に関して放射線量のモニタリングが行われている<sup>1)</sup>。食品については、普段の生活で食品からどれだけ被爆するかを根拠に暫定規制値や基準が設定され、基準値を超えるものは流通しないシステムになっている<sup>2)</sup>。

しかし、一般消費者はそのようなデータを目にする機会が少なく、水産物や農産物を販売するコーナーには産地のみが記載されていることがほとんどである。また、原発事故による農水産物の放射能汚染は過去に例がなく、情報には不確実性があり、政府が公表する情報を信頼せず購入を控える消費者が増加し、風評被害につながる<sup>3)</sup>との報告がある。一方、環境意識や被災地への支援意識が高い消費者は、福島県産への購入意思が高い<sup>4)</sup>という報告もあり、風評被害を払拭するためには正しい情報提供が必要である。

また、流通業者や市場関係者など中間業者の「予想」に基づく行動も重要な要因であり、納入業者が納入先の福島県産品取り扱い姿勢を、納入先の自己評価に比べてネガティブに評価する（福島県産は買ってもらえないから他県産を用意しようと納入先に付度する）ことにより、福島県産が流通されにくくなる状況が存在することが指摘されている<sup>5)</sup>。このような状況では、消費者が産地を気にしていなくても福島県産が流通されないため、購入できない状況が発生する。これらは「風評被害」としてメディアに取り上げられることがあるが、風評被害とは原子力事故の補償問題に関連して用いられてきた言葉で、「ある事件・事故・環境汚染・災害が大々的に報道されることによって、本来『安全』とされる食品・商品・土地を人々が危険視し、消費や観光をやめることによって引き起こされる経済的被害」と定義されている<sup>6)</sup>。本来、安全である食材が流通されなかったり、価格を低く抑えられたりすることはあってはならない。

大量の食材を取り扱う機会が多い栄養士は、食材の産地を選択する立場にあるが、栄養士養成課程で放射能の種類や放射線量について学ぶ機会は少なく、風評被害払拭のための取り組みについて学ぶ機会はまれである。しかし、風評被害は福島原発事故に限らず今後も様々な場面で起こりうるため、風評被害の防止・払拭のためには、安全性に関する情報発信と共に積極的な販売などの取り組みが重要<sup>7)</sup>であり、様々な食品や情報を取り扱う栄養

養士の教育においても必要と思われた。

今回、福島を習慣的に支援する取り組みを行っているN給食受託会社より福島支援活動の一環として、福島県産の魚介類を使用したメニューコンテスト参加の提案があった。昨今、福島県産の食材を使ったイベントは各地で「常磐もの」として注目されており、「食べて応援」の機運が高まっていることをふまえ、筆者の担当する学生を対象としてメニューコンテストを実施することとした。福島支援のためのメニューコンテストに取り組むことで、問題に対処する力の向上や、他者を援助する気持ちの変化が期待された。前者については日常生活で生じるさまざまな問題や要求に対して建設的かつ効果的に対処するために必要な能力を測る日常生活スキル尺度<sup>8)</sup>を用い、後者については他者を援助する態度及び価値観の変化を測定する援助成果志向性尺度<sup>9)</sup>を用いて測定可能と思われ、調査を行うこととした。また、福島原発事故に関連する水産物の放射線量の管理体制や風評被害の発生原因と併せて、料理写真の撮影方法や活用方法の教育も行い、認識の変化について調査を行うこととした。

メニューコンテストを通じて、これらの調査を行った先行研究はこれまでに見あたらず、本研究には新規性があると思われる。

## 2. 目的

福島県の食材を使ったメニューコンテストへの参加を通して、福島原発事故における風評被害について理解を深め、献立作成及び調理の知識と技術が風評被害の払拭に役立つと認識することで、日常生活スキル<sup>8)</sup>や援助成果志向性<sup>9)</sup>、風評被害についての認識等に変化をもたらされるのではないかという仮説を立てた。その上で、メニューコンテストに参加した群としない群で相違があるかどうかを明らかにすることを目的とした。また、メニューコンテストに参加した群が風評被害払拭や料理写真の活用方法についてどのような認識を持つのかについて明らかにすることを目的とした。

## 3. 方法

### (1) 研究デザイン

単施設非ランダム介入研究

### (2) 調査協力者

筆者が勤務する栄養士養成専門学校栄養士科2年生のうち、コンテストに参加するグループを「参加群」とし、参加しない群を「非参加群」とする。参加群は栄養医療コースの学生22人、非参加群はその他のコース（栄養調理コース、栄養食育コース、スポーツ栄養コース）83人とし、アンケート調査を実施した。なおコース分けは本人の希望に基づき1年次3月に行っており、1年次の教育内容は4コース共通である。

### (3) 適格基準

同意が得られ、調査用紙に記載漏れや誤りがない場合を適格基準とした。

### (4) 除外基準

調査用紙の提出がない場合、同意が得られない場合、調査用紙への未記入がある場合を除外基準とした。

#### (5) 期間

調査・研究期間は令和6年7月1日から令和7年1月10日までとし、データ保管期間は10年とした。

#### (6) 場所

調査の実施場所は対象学生の在籍する教室とし、データ分析及びデータ保管場所は本校職員室とした。

#### (7) 調査内容

質問紙の構成を表1に示した。記入漏れなどの確認を行うため調査は記名式とした。

表1 質問紙の構成

①	日常生活スキル尺度（大学生版） <sup>8)</sup>
②	援助成果志向性尺度 <sup>9)</sup>
③	風評被害についての質問
④	料理写真の難しさについての質問、カトラリー類の重要性についての質問
⑤	自由記入 料理写真撮影について、風評被害払拭のために栄養士としてできること、感想、優秀賞のメニューが社員食堂で提供されたことについて、レシピ集について、レシピ集の活用方法について

#### (8) 調査の流れ

表2に調査の流れと対象となる集団について記載した。

##### 1) 研究内容の説明・同意書作成

コースごとに説明の時間を設け、「研究へのご協力をお願い」の説明用紙を用いて、十分な説明を行った。質問があれば回答し、疑問を解消した。同時に同意書を配布し学生に記入を求め、提出をもって同意とみなし、解析対象とした。

##### 2) 調査の実施

アンケート用紙を配布し、自記式記名式で記入を求めた。1回目アンケートはメニューコンテスト前の9月、2回目アンケートはメニューコンテスト後の12月に実施した。

##### 3) データの入力

データ入力の前に、回答用紙に記入漏れや明らかな記入ミスが認められた場合は、本人に確認し修正を行った。修正の返答がない場合は同意の意思がないとみなし除外した。

##### 4) 日常生活スキル尺度（大学生版）<sup>8)</sup>

日常生活スキル尺度（大学生版）24項目を使用した。本尺度は日常生活を過ごすために必要なライフスキルを測るもので、「親和性」「リーダーシップ」「計画性」「感受性」「情報要約力」「自尊心」「前向きな思考」「対人マナー」の8つの下位尺度から構成され

ており、それぞれ3つの質問が設定されている。回答方法は4件法で「非常に当てはまる」を4点、「わりと当てはまる」を3点、「あまり当てはまらない」を2点、「ぜんぜん当てはまらない」を1点とし、得点が高いほどスキルが高いことを意味する。過去に多くの研究で使用されており、信頼性及び妥当性が確認されている。本研究では各項目の3つの質問の回答を合計し、解析に使用した。島本らの報告から、前向きな思考に関する質問のうち、1項目は逆転項目とされており、評定値は分析の際に反転処理された<sup>8)</sup>。

表2 調査の流れと調査対象

	参加群	非参加群
	22人	76人
7月 コンテスト用レシピの基準説明（栄養・材料費等）の後 献立作成を実施 既定食材：福島県産イワシまたはシラス、価格：250円以内 エネルギー：200～500kcal（丼物は600～800kcal）	○	—
8月 夏期休暇中、自宅で試作（任意）	○	—
9月 1回目アンケート調査（表1 ①～③） レシピ提出→教員による個別アドバイス	○ ○	○ —
10月①講義 ・福島県の魚介類に風評被害について ・農水産物の放射線量の検査、ALPS処理水等について ・応募レシピの一部が社員食堂で提供されることで 風評被害払拭や福島支援につながることを説明 ② 作成したレシピを元に調理を行い撮影 ③ レシピに写真を添付してコンテストに応募	○	—
11月 受賞者の決定・発表、表彰式、受賞作品の試作会	○	—
12月① 受賞レシピをT社社員食堂で提供 受賞者はお客様にメニューのチラシを配布 （販売促進活動体験） ② 受賞者から参加群に対し①の内容を周知・共有 ③ 全員のレシピをレシピ集として作成し、参加群に配布 レシピ集を用いて教員からコメントをフィードバック ④ アンケート調査（表1 ④⑤）	○	—
12月 2回目アンケート調査（表1 ①～③）	○	○
12～1月 集計、解析	○	○

#### 5) 援助成果志向性尺度<sup>9)</sup>

援助成果志向性とは、「過去の援助成果に関わる援助経験を中心にして習得した援助成果に対する志向性や態度あるいは価値観」と定義されている。18項目からなる尺度で、回答方法は5件法で「当てはまる」を5点、「まああてはまる」を4点、「どちらともいえない」を3点、「あまりあてはまらない」を2点、「あてはまらない」を1点とし、得点が高いほど、援助への意識が高いことを意味する。

#### 6) 東日本大震災に伴う原発事故についての質問

表4~7「風評被害に関する質問」は本研究のために考案された質問である。対象者には4件法で「非常に当てはまる」を4点、「少し当てはまる」を3点、「あまり当てはまらない」を2点、「ぜんぜん当てはまらない」を1点として回答を求めた。風評被害に関する質問5のみ参加群に実施した。

#### 7) 料理写真撮影について

次の2つの質問、料理写真は難しいか（簡単1⇔難しい4）、ランチョンマット・カトラリー類は重要か（いいえ1⇔重要4）について4件法で回答を求めた。

### (9) コンテストについて

N給食会社の福島支援の企画のアイデアメニューコンテストに本校を含む栄養士養成校3校が参加し、本校からは個人で22人が応募した。学内で審査後、N給食会社が選定を行い、最終的に各校優秀賞1人、佳作2人が選出され、表彰式及び優秀賞のメニューの試作会が行われた。優秀賞のメニューはN給食会社が受託している社員食堂で各200食が提供され、受賞者は見学及びフライヤーを用いた販売促進活動を体験した。当日、本校の優秀賞の学生が一般社団法人日本電気協会新聞部の取材を受け、2024年12月26日の電気新聞に掲載された。

### (10) 統計解析方法

未記入がある者と同意書未提出の計7人を除外し76人を解析対象とした。調査項目の統計解析については、等分散を仮定した2標本の検定（t検定）及び一対の標本による平均の検定（t検定）を用いた。また統計ソフトウェアはMicrosoft®Excel®2016MSO（16.0.13426.20270）32ビットを用いて解析を行い、有意水準は5%未満とした。

### (11) 倫理的配慮

本研究で得られた情報は、紛失、個人情報漏洩がないように鍵の掛かる場所で厳重に保管することとした。対象者には、事前に本研究の目的、方法、データの活用方法について説明し、研究への参加・辞退は自由意志とし、不参加の場合も不利益は生じない旨を説明した。

#### 4. 結果

表 3 及び表 4 の結果から、1 回目の調査では参加群と非参加群に有意な差は認められなかった。表 5 では参加群の 1 回目と 2 回目の比較を行ったが、援助成果志向性尺度 17、18 の質問で 2 回目の得点が低く、有意な差が認められた (質問 17:  $p < 0.01$ 、質問 18:  $p < 0.05$ )。表 6 では非参加群の 1 回目と 2 回目の比較を行ったが、風評被害に関する質問の 1 と援助成果志向性に関する質問 1、5、14 で 2 回目の得点が低く、有意な差が認められた ( $p < 0.05$ )。表 7 では、参加群と非参加群の 2 回目を比較したが、風評被害に関する質問 3「栄養士は風評被害軽減に貢献できる」、4「栄養士は社会貢献できる仕事である」で参加群の得点が非参加群に比べて高く、有意な差が認められた ( $p < 0.05$ )。この質問について表 5、表 6 で両群の 1 回目と 2 回目に有意な差は認められなかったが、個別の回答結果では、2 回目に得点が低下した者が参加群に 10%未満、非参加群に約 30%存在しており、非参加群に得点が低下した者が多かった。

また表 7 では、援助成果志向性尺度の質問 5「人に何かしてあげると思いやり意識が身につくと思う」においても、参加群 2 回目の得点が非参加群に比べて高く、有意な差が認められた ( $p < 0.01$ )。

表 3 基本情報

	参加群 $n=22$	非参加群 $n=76$	$p$ 値
年齢(歳)	26.3±10.4	26.0±1.3	0.9213
男性(人)	2	13	0.3630
女性(人)	20	63	

$p$ 値: 等分散を仮定した2標本による検定(t検定)

表 4 参加群 1 回目と非参加群 1 回目の比較

		参加群 1回目 (n=22)		非参加群 1回目 (n=76)		p値
		平均	標準偏差	平均	標準偏差	
スキル 日常生活 尺度	1 親和性	9.8	1.9	9.8	2.1	0.8602
	2 リーダーシップ	7.4	2.3	7.4	2.5	0.9638
	3 計画性	7.3	2.5	8.0	2.8	0.3347
	4 感受性	10.0	1.7	9.4	2.2	0.2861
	5 情報要約力	7.6	2.1	8.1	1.9	0.3279
	6 自尊心	8.0	2.6	8.2	2.3	0.7223
	7 前向きな思考	7.3	2.1	8.1	2.2	0.1528
	8 対人マナー	10.5	1.8	10.5	1.8	0.9758
関風 す評 る被 質害 問に	1 原発事故に伴う風評被害について気にする。	2.5	1.0	2.3	0.9	0.3422
	2 福島県・常盤物の魚介類を購入したいと思う。	3.2	0.5	2.9	1.0	0.0941
	3 栄養士は風評被害の軽減に貢献できると思う。	3.4	0.7	3.1	0.8	0.0990
	4 栄養士は社会貢献できる仕事だと思う。	3.6	0.5	3.4	0.7	0.1526
	5 今回の取り組みは風評被害の軽減に役立つ。	3.5	0.6	—	—	—
援助 成果 志向 性 尺 度	1 人への好意や援助から、私は喜びや感動を経験することがある。	4.5	1.0	4.5	0.7	0.9426
	2 もし人から自分の行為を感謝されたら、私は喜びを感じる。	4.6	0.8	4.6	0.7	0.8182
	3 人に何かしてあげると私は自分が人の役に立てたと感じる。	4.3	1.0	4.5	0.8	0.3831
	4 私は人に喜ばれると嬉しい。	4.5	1.0	4.7	0.7	0.4698
	5 人に何かしてあげると思いやり意識が身につくと思う。	4.2	1.0	4.5	0.8	0.2454
	6 私は、たとえ知らない人同士でも、思いやり行動を介した人間的ふれ合いは望めると思う。	4.4	0.8	4.2	0.8	0.3526
	7 人から感謝されると、私は奮起する。	4.2	0.8	4.2	0.8	0.8322
	8 人に何かしてあげると、私は気持ちの充足感が得られる。	4.1	0.9	4.2	0.9	0.5906
	9 援助をすると、私自身を高める目標が生まれる。	3.8	1.0	3.9	1.0	0.6944
	10 人への好意や援助は、私の生活の中で重要な行動である。	4.0	1.0	4.0	1.0	0.9801
	11 私は、相手への好意や援助は良好な人間関係に寄与すると思う。	4.5	0.8	4.3	0.8	0.2695
	12 援助をすると、私の中に相手の幸福・安寧のための新たな目標が生まれる。	3.9	1.0	3.9	1.0	0.9430
	13 私は人を助けると、人や地域にもっと貢献しようという気持ちになる。	4.1	1.0	3.8	1.1	0.3327
	14 援助で関わった人から教えられ、私自身の勉強になることがある。	4.3	0.9	4.2	0.8	0.5191
	15 私は人に喜ばれるのが好きだ。	4.5	0.8	4.5	0.8	0.9208
	16 私はちょっとした親切でも互いに心が通じ合うことがあると思う。	4.3	0.9	4.2	1.0	0.5070
	17 私は感謝やお礼がなくても相手のためになっていると実感できる。	4.1	0.8	3.8	1.1	0.1932
	18 私は人に何かをしてもらうより、人に何かをしてあげることの方が嬉しい。	4.3	0.9	3.9	1.1	0.0960

p値: 等分散を仮定した2標本による検定 (t検定)

表 5 参加群 1 回目と 2 回目の比較

		参加群 1回目 (n=22)		参加群 2回目 (n=22)		p値
		平均	標準偏差	平均	標準偏差	
スキル 日常生活 尺度	1 親和性	10.0	1.9	9.5	2.4	0.1708
	2 リーダーシップ	7.4	2.3	7.1	2.6	0.3184
	3 計画性	7.3	2.5	7.6	2.9	0.4378
	4 感受性	10.0	1.7	10.0	1.7	0.4378
	5 情報要約力	7.6	2.1	7.1	2.3	0.1157
	6 自尊心	8.0	2.6	7.6	2.4	0.2575
	7 前向きな思考	7.3	2.1	7.5	2.3	0.3287
	8 対人マナー	10.5	1.8	10.9	1.4	0.3127
関風 す評 る被 害 質 害 問 に	1 原発事故に伴う風評被害について気にする。	2.5	1.0	2.0	0.9	0.0829
	2 福島県・常盤物の魚介類を購入したいと思う。	3.2	0.5	3.4	0.7	0.3287
	3 栄養士は風評被害の軽減に貢献できると思う。	3.4	0.7	3.6	0.6	0.1621
	4 栄養士は社会貢献できる仕事だと思う。	3.6	0.5	3.8	0.5	0.1035
	5 今回の取り組みは風評被害の軽減に役立つ。	3.5	0.6	3.6	0.7	0.5758
援助 成 果 志 向 性 尺 度	1 人への好意や援助から、私は喜びや感動を経験することがある。	4.5	1.0	4.5	0.6	1.0000
	2 もし人から自分の行為を感謝されたら、私は喜びを感じる。	4.6	0.8	4.6	0.7	1.0000
	3 人に何かしてあげると私は自分が人の役に立てたと感じる。	4.3	1.0	4.5	0.7	0.1103
	4 私は人に喜ばれると嬉しい。	4.5	1.0	4.8	0.4	0.3080
	5 人に何かしてあげると思いやり意識が身につくと思う。	4.2	1.0	4.6	0.7	0.1035
	6 私は、たとえ知らない人同士でも、思いやり行動を介した人間的ふれ合いは望めると思う。	4.4	0.8	4.4	0.7	1.0000
	7 人から感謝されると、私は奮起する。	4.2	0.8	4.1	1.0	0.4514
	8 人に何かしてあげると、私は気持ちの充足感が得られる。	4.1	0.9	4.2	0.9	0.6482
	9 援助をすると、私自身を高める目標が生まれる。	3.8	1.0	3.7	1.0	0.7147
	10 人への好意や援助は、私の生活の中で重要な行動である。	4.0	1.0	4.0	1.1	0.8246
	11 私は、相手への好意や援助は良好な人間関係に寄与すると思う。	4.5	0.8	4.5	0.7	0.6482
	12 援助をすると、私の中に相手の幸福・安寧のための新たな目標が生まれる。	3.9	1.0	3.7	1.2	0.5758
	13 私は人を助けると、人や地域にもっと貢献しようという気持ちになる。	4.1	1.0	3.7	0.9	0.0572
	14 援助で関わった人から教えられ、私自身の勉強になることがある。	4.3	0.9	4.1	0.9	0.3287
	15 私は人に喜ばれるのが好きだ。	4.5	0.8	4.5	0.7	1.0000
	16 私はちょっとした親切でも互いに心が通じ合うことがあると思う。	4.3	0.9	4.2	0.7	0.5894
	17 私は感謝やお礼がなくても相手のためになっていると実感できる。	4.1	0.8	3.6	1.0	0.0081 **
	18 私は人に何かをしてもらいより、人に何かをしてあげることの方が嬉しい。	4.3	0.9	3.9	1.0	0.0379 *

p値: 一対の標本による平均の検定(t検定) \*\*<0.01;\*<0.05.



表 6 非参加群 1 回目と 2 回目の比較

		非参加群 1回目 (n=76)		非参加群 2回目 (n=76)		p値
		平均	標準偏差	平均	標準偏差	
スキル 日常生活 尺度	1 親和性	9.8	2.1	9.8	2.3	0.9002
	2 リーダーシップ	7.4	2.5	7.6	2.4	0.5540
	3 計画性	8.0	2.8	7.6	2.9	0.3768
	4 感受性	9.4	2.2	9.5	2.2	0.8728
	5 情報要約力	8.1	1.9	7.8	2.2	0.4761
	6 自尊心	8.2	2.3	7.7	2.3	0.2355
	7 前向きな思考	8.1	2.2	8.2	2.1	0.5771
	8 対人マナー	10.5	1.8	10.1	2.1	0.2289
風評 被害 質問	1 原発事故に伴う風評被害について気にする。	2.3	0.9	2.0	0.8	0.0250 *
	2 福島県・常盤物の魚介類を購入したいと思う。	2.9	1.0	3.0	0.9	0.2324
	3 栄養士は風評被害の軽減に貢献できると思う。	3.1	0.8	3.1	0.7	0.8289
	4 栄養士は社会貢献できる仕事だと思う。	3.4	0.7	3.3	0.8	0.3888
	5 今回の取り組みは風評被害の軽減に役立つ。	—	—	—	—	—
援助 成果 志向性 尺度	1 人への好意や援助から、私は喜びや感動を経験することがある。	4.5	0.7	4.2	0.9	0.0302 *
	2 もし人から自分の行為を感謝されたら、私は喜びを感じる。	4.6	0.7	4.4	0.9	0.0583
	3 人に何かしてあげると私は自分が人の役に立てたと感じる。	4.5	0.8	4.3	0.9	0.1850
	4 私は人に喜ばれると嬉しい。	4.7	0.7	4.4	0.8	0.0506
	5 人に何かしてあげると思いやり意識が身につくと思う。	4.5	0.8	4.2	0.9	0.0316 *
	6 私は、たとえ知らない人同士でも、思いやり行動を介した人間的ふれ合いは望めると思う。	4.2	0.8	4.1	0.9	0.2110
	7 人から感謝されると、私は奮起する。	4.2	0.8	4.0	0.9	0.1354
	8 人に何かしてあげると、私は気持ちの充足感が得られる。	4.2	0.9	4.0	1.0	0.1933
	9 援助をすると、私自身を高める目標が生まれる。	3.9	1.0	3.7	1.1	0.3521
	10 人への好意や援助は、私の生活の中で重要な行動である。	4.0	1.0	3.8	1.1	0.0790
	11 私は、相手への好意や援助は良好な人間関係に寄与すると思う。	4.3	0.8	4.1	0.9	0.1286
	12 援助をすると、私の中に相手の幸福・安寧のための新たな目標が生まれる。	3.9	1.0	3.7	1.1	0.1652
	13 私は人を助けると、人や地域にもっと貢献しようという気持ちになる。	3.8	1.1	3.6	1.1	0.1236
	14 援助で関わった人から教えられ、私自身の勉強になることがある。	4.2	0.8	3.9	1.1	0.0475 *
	15 私は人に喜ばれるのが好きだ。	4.5	0.8	4.3	0.9	0.1137
	16 私はちょっとした親切でも互いに心が通じ合うことがあると思う。	4.2	1.0	3.9	1.0	0.1098
	17 私は感謝やお礼がなくても相手のためになっていると実感できる。	3.8	1.1	3.5	1.1	0.0839
	18 私は人に何かをしてもらうより、人に何かをしてあげることの方が嬉しい。	3.9	1.1	3.8	1.1	0.7302

p値: 一対の標本による平均の検定(t検定) \* < 0.05.

表7 参加群2回目と非参加群2回目の比較

		参加群 2回目 (n=22)		非参加群 2回目 (n=76)		p値
		平均	標準偏差	平均	標準偏差	
スキル 日常生活 尺度	1 親和性	9.5	2.4	9.8	2.3	0.5593
	2 リーダーシップ	7.1	2.6	7.6	2.4	0.3928
	3 計画性	7.6	2.9	7.6	2.9	0.9496
	4 感受性	10.0	1.7	9.5	2.2	0.2899
	5 情報要約力	7.1	2.3	7.8	2.2	0.1967
	6 自尊心	7.6	2.4	7.7	2.3	0.7985
	7 前向きな思考	7.5	2.3	8.2	2.1	0.2204
	8 対人マナー	10.9	1.4	10.1	2.1	0.1234
関風 評す る被 質害 問に	1 原発事故に伴う風評被害について気にする。	2.0	0.9	2.0	0.8	0.6728
	2 福島県・常盤物の魚介類を購入したいと思う。	3.4	0.7	3.0	0.9	0.1096
	3 栄養士は風評被害の軽減に貢献できると思う。	3.6	0.6	3.1	0.7	0.0051 **
	4 栄養士は社会貢献できる仕事だと思う。	3.8	0.5	3.3	0.8	0.0051 **
	5 今回の取り組みは風評被害の軽減に役立つ。	3.6	0.7	—	—	—
援助 成果 志向 性 尺 度	1 人への好意や援助から、私は喜びや感動を経験することがある。	4.5	0.6	4.2	0.9	0.1257
	2 もし人から自分の行為を感謝されたら、私は喜びを感じる。	4.6	0.7	4.4	0.9	0.2741
	3 人に何かしてあげると私は自分が人の役に立てたと感じる。	4.5	0.7	4.3	0.9	0.1819
	4 私は人に喜ばれると嬉しい。	4.8	0.4	4.4	0.8	0.0716
	5 人に何かしてあげると思いやり意識が身につくと思う。	4.6	0.7	4.2	0.9	0.0464 *
	6 私は、たとえ知らない人同士でも、思いやり行動を介した人間的ふれ合いは望めると思う。	4.4	0.7	4.1	0.9	0.0859
	7 人から感謝されると、私は奮起する。	4.1	1.0	4.0	0.9	0.5722
	8 人に何かしてあげると、私は気持ちの充足感が得られる。	4.2	0.9	4.0	1.0	0.4431
	9 援助をすると、私自身を高める目標が生まれる。	3.7	1.0	3.7	1.1	0.9145
	10 人への好意や援助は、私の生活の中で重要な行動である。	4.0	1.1	3.8	1.1	0.3668
	11 私は、相手への好意や援助は良好な人間関係に寄与すると思う。	4.5	0.7	4.1	0.9	0.1271
	12 援助をすると、私の中に相手の幸福・安寧のための新たな目標が生まれる。	3.7	1.2	3.7	1.1	0.7961
	13 私は人を助けると、人や地域にもっと貢献しようという気持ちになる。	3.7	0.9	3.6	1.1	0.5472
	14 援助で関わった人から教えられ、私自身の勉強になることがある。	4.1	0.9	3.9	1.1	0.4268
	15 私は人に喜ばれるのが好きだ。	4.5	0.7	4.3	0.9	0.2477
	16 私はちょっとした親切でも互いに心が通じ合うことがあると思う。	4.2	0.7	3.9	1.0	0.2248
	17 私は感謝やお礼がなくても相手のためになっていると実感できる。	3.6	1.0	3.5	1.1	0.6776
	18 私は人に何かをしてもらうより、人に何かをしてあげることの方が嬉しい。	3.9	1.0	3.8	1.1	0.9336

p値: 等分散を仮定した2標本による検定(t検定) \*\*<0.01,\*<0.05.

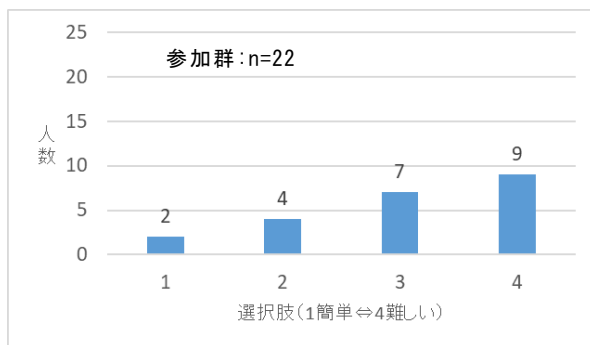


図1 「料理写真は難しいか」の回答

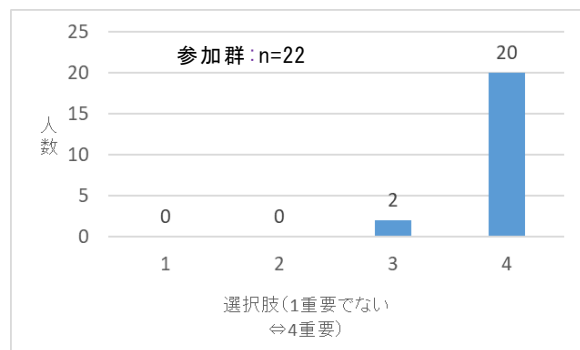


図2 「ランチョンマット・カトラリーは重要か」の回答

表 8 参加群の感想（抜粋）（記述式）

<p>1. 料理写真撮影について</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・お皿や周りの色で全然変わった。</li> <li>・きれいに撮ってくれてありがとうございます。撮影は苦手なので教わりたいです。</li> <li>・背景が変わることで写り方が全然違うんだと勉強になった。</li> <li>・食器や周りの色によって料理の見え方が変わっておいしそうに見えた。光を当てて撮るのも大事だと思いました。</li> <li>・皿やランチョンマットの組み合わせを考えるのが楽しかったです。</li> <li>・立体感を伝える撮影は難しい。湯気もうつような美味しさが伝わるような写真を撮りたいと思った。</li> </ul>
<p>2. 栄養士としてできること</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・集団給食で福島県の食品を使用し、風評被害に関する啓蒙活動をする。</li> <li>・放射性物質と食品の関係を科学的な視点から啓蒙活動をする。</li> <li>・情報発信できるようにきちんと現状を知り、発信ができるように媒体などを工夫する。</li> <li>・福島県の料理や食材を使用した献立をたてる。</li> <li>・公的な資料を確認したり、様々な情報を手に入れて正しい情報を多くの人に伝える。</li> <li>・卓上メモ、フライヤーなどで産地メニューを書いて安全をアピールする。</li> <li>・媒体などで福島の魅力について書く。</li> <li>・放射性物質が心配だと思う人の気持ちに寄り添い、安全性を伝える。</li> <li>・復興の企画に携わる機会があれば積極的に取り組む。</li> <li>・セミナーやイベントを行う。</li> <li>・消費者に無害であることを伝えるために、媒体や献立に取り入れる。</li> <li>・正しい知識を発信し、献立などに取り入れて、美味しさを身を持って伝えていきたい。</li> <li>・ポイコッターに向けて作る（アンチを減らす）。</li> <li>・卓上メモやポスターなどの媒体を通してお客様に福島県の良さを知ってもらう。</li> </ul>
<p>3. 感想</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・福島県に対する風評被害は、科学に対する不信心、外交の問題、環境に対する意識など複雑に絡み合っており、解決に時間がかかりそうだ。</li> <li>・科学的な視点を大切にしながらこの問題について考えていきたい。</li> <li>・価値として過小評価されてしまっているのは非常にもったいないことなので、不安を取り除き、需要と供給が活発になるような一助ができれば良いと思った。</li> <li>・風評被害を減らすには、正しい知識や情報を持ち、継続的に発信していくことが重要だと学んだ。</li> <li>・風評被害は恐怖や科学的根拠がない情報から起こることも少なくないため栄養士として正しい情報を提供していきたい。</li> <li>・この授業で私は自分が風評被害や復興についてどこか他人事として考えているところもあったのではないかと気づいた。自分の意見を考える良い機会があつてよかったと思う。</li> <li>・福島産だから買わないと差別するのではなく、旅行に行ったり、アンテナショップ等に行つて積極的に買って経済を活性化することが支援につながると思います。</li> <li>・原発事故が発生してからしばらくは風評被害がとてもひどかったように記憶しています。</li> <li>・自分も勝手に福島のもものが売られていても避けてしまっていた気がします。</li> <li>・あまり調べずに言っていたので、もっと知っておくべきだったなと思いました。</li> <li>・自分自身の偏見をなくして積極的に情報発信をしていかなければならないなと思いました。</li> <li>・事故発生から調査を続け、対策をしていることがわかりました。長い間、風評被害に苦しみ、大変だったと思います。</li> <li>・震災から10年以上経った今も福島の食材を使ったメニューを提供し続けているのが凄いなと思った。</li> <li>・食べて応援するという文化は日本に定着したなと思います。</li> <li>・災害があると応援の気持ちでその産地の物を食べるようになりました。</li> <li>・学んだことを周りの人に伝えようと思った。</li> <li>・知ってもらうことで福島についての偏見が減って、食材を食べってくれる人が増えればいいと思います。</li> <li>・いままで放射能による風評被害があるということも知らなかったので、知れてよかったです。</li> <li>・自分にできることをして協力したいと思いました。</li> <li>・安いと思って買った野菜が福島県産であつたことがよくあります。私は産地よりも鮮度と価格で購入するので、買った後に福島県産なんだと気がつきます。</li> <li>・事故から長い時間がたつた今でも、まだ風評被害などで大変な思いをしているんだと改めて考えさせられた。</li> <li>・自分たちにできることは積極的に行動に移していきたい。</li> <li>・地元の食材などを使用することも大事だなと感じた。</li> <li>・個人としても栄養士としても、福島県の食材をたくさんの方々に味わってもらえるように、今回の授業で学んだことを活かし正しい情報を広めていこうと思いました。</li> </ul>

表 9 参加群の感想（記述式）

1. 優秀賞メニューが社員食堂で提供されたという話を聞いてからの感想

- ・完売できたと聞いた時、私まで嬉しくなりました。
- ・私たちが考えたレシピを実際に食べてもらえることにやりがいと感動があります。
- ・食べてもらうためにお客様に声かけて、完売した喜びを聞いて、私も嬉しく思います。
- ・受賞はしなかったが、人のためにレシピを考え、色々な想いで作ることができて良かったです。
- ・社会に出たら、このような取り組みを自ら率先してできる栄養士になれるよう努力をしていきたい。
- ・自分たちでレシピを考案し、共有することで、食材（いわし、しらす）に対する興味や関心が深まった。
- ・同じクラスの方が素晴らしいメニューを考案され、実際に提供されていて思い出になりました。
- ・福島の食材で、大量調理向けメニューの考案は難しかったが、他の人のレシピのアイデアなどとても参考になった。
- ・普段、学んでいることが出せる機会だったと思います。
- ・企業と協力することで、たくさんできるが増えると思いました。
- ・テーマに沿って作成した献立を食べてもらうと印象に残るので良いことだと思った。
- ・自分が携わった献立を喫食者が食べている様子を生で見ることは凄い喜びを感じると思う。  
自分のレシピもいつかどこかで提供できるように腕を磨きたいと思いました。
- ・自分が作成したメニューが大量調理されているのを見られるのは実感があり、モチベーションが上がると思った。
- ・今回の社員食堂は、毎月「福島支援」に取り組んでいるとのことで、継続しているのが良いと感じた。
- ・同じ学校の人のメニューが販売されていてすごいと思いました。
- ・色々な方に自分の考えたメニューを提供できるのはすごく嬉しいことだなと感じた。
- ・また、色々なレシピを考えてみたいです。
- ・普段、経験できないことが経験できて良いと思いました。
- ・レシピを考える上で色々調べたので、とても勉強になると思いました。
- ・「常盤もの」という言葉を知り、学ぶことができた。意識することで何か変わると思った。

2. 自分たちの考案したメニューが「レシピ集」になったことについて

- ・みんなががんばって作ったものがレシピ集になってすごいなと思った。
- ・自分たちの作ったレシピを大量調理にアレンジする方法も載っていて学びにつながった。
- ・自分が作ったメニューがレシピ集になると、すごく「自分で作った実感」があって良いと思いました。
- ・他の人のレシピについては、味付けや調理法を聞けなかったのが嬉しい。
- ・気になる料理があり、作ってみたいと思っていたので、レシピ集は嬉しい。
- ・色々な料理があって、同じメニューでも調味料や付け合わせが違い、家で作ってみようと思った。
- ・同じ食材を使ってもこんなに色々アレンジできるのだと思った。
- ・とても嬉しく、大切にします。ありがとうございました。
- ・彩りも美しく、わかりやすいレシピ集だった。
- ・レシピ集、とても嬉しいです。学生時にしたことを覚えておけるので、思い出になりました。
- ・他の方のレシピや販売促進、表彰式の様子まで記載されていて、思い出になりました。
- ・たくさんのアイデアが詰まっていて、とても参考になる。
- ・どれもおいしそうで、作ってみたいくなるレシピばかりだった。
- ・みんなのレシピが載っていておもしろい。
- ・冊子になり嬉しかった。達成感があった。
- ・和風、洋風の様々なレシピも載っているので、家で作ってみたいと思いました。
- ・おしゃれにできていてすごかったです。
- ・もつとがんばって考えればよかったなと思いました。
- ・自分たちが考え、作ったものが形になるのが嬉しかった。

3. 将来、自分でレシピ集を作り、教材として使用することに興味はあるかと尋ね、「ある」と答えた人への質問(8/22人)

レシピ集をどのように活用したいと思いますか？

- ・病態ごとに栄養管理のポイントなども取り入れてある献立と作成のコツを載せ、献立作成マニュアルのような資料とする。
- ・色々なアイデアで、たくさんの人に伝えたい。
- ・自分が作ったレシピを広めて、みんなに作ってもらいたい。
- ・対象者別にレシピ集を作って配る。そして栄養指導セミナーを開き、行動変容につなげたい。
- ・自分でこだわりのつまんだメニューを集めることができれば良いなと思いました。
- ・保育園であれば子供と作れるレシピ、病院や高齢者施設であれば簡単に作れるレシピなど作ってみたいと思える資料として活用したい。
- ・色々な方に見てもらいたい。
- ・実際に提供した給食レシピを家でも作れるように配布する。
- ・電子レンジだけでできる料理のレシピ集。
- ・自分が在学中に立てた献立を実際に作り、レシピにしたい。



1. 優秀賞

「しらすたっぷりチャーハン」

2. 佳作

「シラスの唐揚げ」

3. 佳作

「まいわしのポッテリ揚  
みそかんぷら風 ソース添え」

図3 受賞作品



図4 社員食堂で提供された優秀作品



図5 販売促進活動（フライヤーを配布）



図6 レシピ集

## 5. 考察

本研究では栄養士養成専門学校の学生を対象とし、メニューコンテストを通じた風評被害払拭の取り組みの有無による日常生活スキル<sup>8)</sup>や援助成果志向性<sup>9)</sup>及び風評被害についての認識の違いと、参加群の風評被害払拭や料理写真の活用方法の認識について明らかにすることを目的とした。

ベースラインにおいては、表3及び表4で参加群と非参加群に差は認められず、両群は偏りが無い集団であることが確認された。

### (1) 日常生活スキル<sup>8)</sup>について

表4の参加群において、福島支援活動に関わることで日常生活スキルの向上が期待され

たが、コンテスト前後で変化はみられなかった。また、表 7 において参加群と非参加群で 2 回目の日常生活スキルに違いはみられなかった。本研究の取り組みには日常生活スキル尺度に影響する要因は含まれていなかった可能性が考えられる。

#### (2) 風評被害について

表 7 において風評被害に関する質問 3「栄養士は風評被害軽減に貢献できると思う」、4「栄養士は社会貢献できる仕事だと思う」では、参加群は非参加群に比べ得点が高かった ( $p < 0.01$ )。しかし、表 5 において参加群の 1 回目と 2 回目では有意差は認められておらず、参加群の風評被害や社会貢献への意識が向上した訳ではなかった。また、表 6 の非参加群においても風評被害に関する質問 3、4 については 1 回目と 2 回目で有意な差は認められなかった。しかし個別の回答では 2 回目に得点が低下した者が非参加群で多かったため、表 7 の参加群と比較した際の有意差につながったと思われる。

本研究のアンケート調査は 2 年次の後半に実施したが、定期試験や就職活動、校外実習など様々な行事が行われる多忙な時期であり、社会貢献への意識は低下しやすい可能性が考えられる。参加群においては、社会貢献への意識の向上までは見られなかったが、メニューコンテストへの参加経験を通して、風評被害払拭や社会貢献への意識が維持されている者が多かったと思われる。

#### (3) 援助成果志向性<sup>9)</sup>について

本研究では、コンテストを通じて参加群では援助成果志向性が向上するのではないかとすることを仮説として挙げたが、コンテスト参加前後で得点に有意差のある上昇がみられた項目はなく、援助意識の向上には至らなかった。本研究は、他者と直に接するボランティア活動とは異なるため、他者への援助体験としてはイメージしにくかったのかもしれない。

表 7 の援助成果志向性尺度の質問 5「人に何かしてあげると思いやり意識が身につくと思う」では、参加群は非参加群に比べ得点が高く有意差が認められた ( $p < 0.05$ )。この結果も (2) と同様に、参加群の 1 回目と 2 回目に有意な差は認められておらず (表 5)、意識が向上したというよりも、現状維持の状態であり、非参加群の 2 回目の意識が低下していた (表 6) ことが、2 群間の差に表れたと思われる。メニューコンテストを通して、他者への支援について考える機会が増えたことで、非参加群である他のコースの学生よりもその意識が維持されやすかった可能性が考えられる。

#### (4) 料理写真撮影について

図 1 の料理写真撮影については、「簡単」を 1、「難しい」を 4 とし 4 段階で回答を求めたところ、3 と 4 を選択した者の合計は 16 人 (73%) だった。本研究の対象者は若年女性が多いため、日常的にスマートフォンで調理実習等の料理撮影を行っており、写真撮影に対し苦手意識は低いものと予想されたが、図 1 の結果では料理写真の撮影を難しく感じる者が多かった。今回のアンケートでは単に「料理写真は難しいか」と尋ねたが、コンテ

トやレシピ集の印象が残っている中でアンケートを実施したため、学生は「見映え良く撮る」「コンテストに入賞するようきれいに撮る」ということをイメージして回答したため、難しく感じたと思われる。

また経験的に学生はランチョンマットやカトラリー類について無頓着であることが多いが、数種類のランチョンマットを置き換えて撮影するなどの様子を見せながら撮影したところ、図 2 では参加群の全員がランチョンマット・カトラリーの重要性を認識していた。

一般的に料理写真は、栄養教育の教材に使用されたり、SNS (Social Networking Service) で情報発信に使用されたり、様々な場面で使用されている。食に関わる仕事を行う栄養士として「料理をおいしそうに見せる」技術は必須であり、コンテストへの応募は「見せる料理写真」を撮る良い機会であったと思われる。

#### (5) その他

風評被害の払拭を目的として参加群に講義を行ったが (表 2 の 10 月)、表 8-3 では「福島県産を避けていた」、「他人事として考えていた」、「風評被害があることを知らなかった」という意見があった。表 8-2 の「栄養士としてできること」では、学生の約半数が「情報発信」について記述していた。参加群は 2011 年には小学校低学年だった者が多く、東日本大震災のことをよく覚えていない。講義では風評被害の発生する原因に「危険かどうか判断できない場合に避ける」も含む、「根拠はないが買わない」「真偽を確かめていないが買わない」<sup>10)</sup> という気持ちが存在していることを伝えた。これらのことが複数の学生に当てはまり、福島県産を忌避する気持ちを理解した上で、風評被害払拭のために栄養士として情報提供を行い、福島県産の食材を給食に使用したいという意見につながっていた。表 8-3 では、全員が前向きな意見を記載しており、風評被害払拭について一定の理解が得られたと思われる。

表 9-1 は、受賞者の考案したメニュー (図 3:1~3) が社員食堂で提供された経験 (図 4~5) を参加群で共有した後の感想である。多くの学生は、自身が実際に体験していなくても、同じコースで学ぶ仲間の体験を通し、献立作成のやりがいや食べてもらう喜びを感じていた。今回は、単に福島産の食材を献立に取り入れるだけでなく、自身では試作を行い、クラスメイトの考えたメニューが風評被害払拭の取り組みを行っている社員食堂で提供される経験を共有したことで、自分ごととして考えることができたと思われる。宇佐美ら<sup>11)</sup> はメニューコンテストを通じて学習意欲の向上を図る取り組みを行ったが、落選しても受賞を身近に感じることができ、受賞作を実際に提供し全員で共有・評価したことも自分のレシピを振り返る機会となったと報告している。また、自分の立てた献立が実際に提供されるという意識をもたせることができ、自発的に思考する動機付けとなったとも報告している。本研究においても同様の傾向がみられ、メニューコンテストに参加することには意義があると思われる。

表 9-2 にはレシピ集 (図 6) の感想、表 9-3 には将来レシピ集をどのように活用するか

についての考えを記載した。学生の段階でレシピ集を作成することは予想外だったようだが、しっかりとレシピを作成し、きれいに写真を撮ってあれば、レシピ集を自身でプリンターを使って作成することができ、写真店に依頼することも可能な時代である。フィードバックを行った際には、これから様々なレシピを作成し、料理の写真をテーマごとにまとめてレシピ集を作り、職場で活用することを薦めたところ、表 9-3 では約半数の学生がレシピ集作成に興味を示し、栄養教育や職場で使用することに想像を巡らしていた。参加群の半数とはいえ、今回の取り組みを通して知識・技術を教育するだけでなく、将来の活動に期待を持たせることができたのは収穫であった。

#### (6) 限界

本研究の限界は、第一に研究の対象は単一施設に所属する学生であり、一般化できる可能性は低いことである。第二に参加群の人数が少なかったことである。本校の4つのコースのうちの1コースを参加群としたため、人数が限定された。第三に本校のコース制が挙げられる。参加群は栄養医療コースを選択した学生であり、元々医療に興味があり、他者を援助したいという意識が根底にあった可能性があり、他者を援助する意識が維持されやすかったかもしれない。本研究ではその点の調査を行っていないため影響の有無については言及できないが、今後の調査においては配慮が必要と思われる。

また、本研究においては参加群に対してのみ、風評被害払拭のための取り組みについて教育を行ったが、教育効果が高い取り組みであれば対象者全員に実施することが望ましい。しかし全員に対し実施するには課題が多い。本校以外にもメニューコンテストをアクティブラーニングとしてカリキュラムに取り入れている他の教育機関はあるが、全ての応募作品へフィードバックができるような体制を整えることも今後の課題であると報告している<sup>11)</sup>。本校の栄養士養成課程においては、放射能や放射線量と食品における基準などは公衆衛生学や食品衛生学、情報提供は栄養教育論、メニューの考案は給食管理実習というように、複数科目で教育が行われている。学生全員に今回のような取り組みを導入するには、科目の選定や献立作成及び試作の時間確保、教育及びフィードバックを行う教員の確保が必要と思われる。

#### 6. まとめ

参加群と非参加群では、風評被害や社会貢献の意識に有意差がみられた。しかし、参加群の意識が向上したのではなく、非参加群の意識が低下したことが要因として考えられる。福島支援メニューコンテストに参加することで、参加群の意識は維持されたと思われる。

#### 7. 参考文献

1) 水産庁. 水産物の放射性物質調査の結果について

<https://jfa.maff.go.jp/j/housyanou/kekka.html#a2>

2) 環境省. 食品中の放射性物質基準値の設定と出荷制限・摂取制限



<https://www.env.go.jp/chemi/rhm/current/08-01-01.html>

- 3) 有賀健. 原発事故と風評被害:食品の放射能汚染に対する消費者意識. 初版第一刷. 京都:昭和堂 2016;25-26.
- 4) Aruga K, Wakamatsu H. Consumer perceptions toward seafood produced near the Fukushima nuclear plant. *Marine Resource Economics* 2018;33(4):373-386.
- 5) 農林水産省. 平成 29 年度福島県産農産物等流通実態調査報告書.  
<https://www.maff.go.jp/j/shokusan/ryutu/attach/pdf/180328-11.pdf>.
- 6) 関谷直也. 「風評被害」の社会心理－「風評被害」の実態とメカニズム－. 災害情報 No. 1 2003;78-79.
- 7) 国立研究開発法人水産研究・教育機構. 東日本大震災後の放射性物質と魚. 初版. 東京:成山堂 2023;124.
- 8) 島本好平, 石井源信. 大学生における日常生活スキル尺度の開発. *教育心理学研究* 2006;54:211-221.
- 9) 妹尾香織, 高木修. 援助・被援助行動の好循環を規定する要因 — 援助成果志向性が果たす機能の検討 —. *関西大学社会学部紀要* 2011;第 42 巻第 2 号:117-130.
- 10) 国立研究開発法人水産研究・教育機構. 東日本大震災後の放射性物質と魚. 初版. 東京:成山堂書店 2023;122.
- 11) 宇佐美晶子, 津 竜子. 学習意欲の向上を目的としたレシピコンテストの活用事例. *鯉淵研報* 2023;33:30-35.

共同研究者

(代表) 亀山こころ

佐々木伶菜

根岸聡美

渡部渉

下田正人

森田十誉子